

山崎 敬*: ルリトラノオ属の新種, サンイントラノオ

Takasi YAMAZAKI*: A new species of
Pseudolysimachion in Japan

鳥根県の神戸川・江川流域の岩地に変ったルリトラノオ属の植物がある。栃木県教育委員会の小倉洋志氏はこれにきつき、1977年仙台で栽培された標本を送ってこられた。葉が著しく細いけれど花はヒメトラノオに似ていたので、ヒメトラノオの一型であると考えた。ただ関東・中部に分布するヒメトラノオとは分布が異なるので、地域的に固定した変種か品種になるのであろうと答えておいた。標本の数が少なかったのでそのままにしておいたところ、昨年になって国立科学博物館の門田裕一氏が、鳥根県でホソバトラノオを採集したと話をされた。ホソバトラノオは中国地方では瀬戸内側に稀にあるだけなので、別のものであろうと考え標本をいただいた所、採集場所も同じで、小倉氏のものと同一であった。

門田氏の標本は地下部も完全に作られていて、短いけれど明らかに地下茎をもっていることがわかった (Fig. 1B)。ルリトラノオ属では今まで明らかな地下茎をもつものは知られていず、ヒメトラノオとはかなり異なることが明らかとなった。よく調べると花の形にも明らかな違いがあり、新種と考えられるのでサンイントラノオと名づける。地元ではホソバトラノオとして扱っていたようである。

サンイントラノオは花冠が深く裂け、花筒はごく短く花冠の長さの1/4以下であるので、花筒が花冠全体の長さの1/3ほどあるホソバトラノオ群とは異り、ルリトラノオ節¹⁾に属するものである。一番近いのは上述したヒメトラノオ *P. rotundum* var. *subsessile* f. *petiolatum* であるけれど、これは草原にはえ、株立ちとなって地下茎が広がることはない。また、がく裂片は狭卵形で先がややとがり、短くて果期でもせいぜい2 mmほどで花冠より著しく短い。サンイントラノオは明らかな地下茎があり岩の割れ目をはって広がっている。がく裂片は線形で先が鈍く、花期に長さ2-3 mm、果期には3-4 mmほどになり、花冠の半分から半分以上を越す長さである。

京都大学理学部植物学教室のホソバトラノオのカバーの中からも数枚のサンイントラノオの標本を見つけることができた。本種の分布は今の所鳥根県だけに限られていて、

* 東京大学 理学部附属植物園. Botanical Gardens, Faculty of Science, University of Tokyo, Hakusan 3-7-1, Bunkyo-ku, Tokyo 112.

- 1) *Pseudolysimachion* sect. *Sajanensia* (Borisova) Yamazaki, comb. et stat. nov.
Veronica sect. *Pseudolysimachion* ser. *Sajanensis* Borisova in Fl. U. R. S. S.
22: 374, 1955.

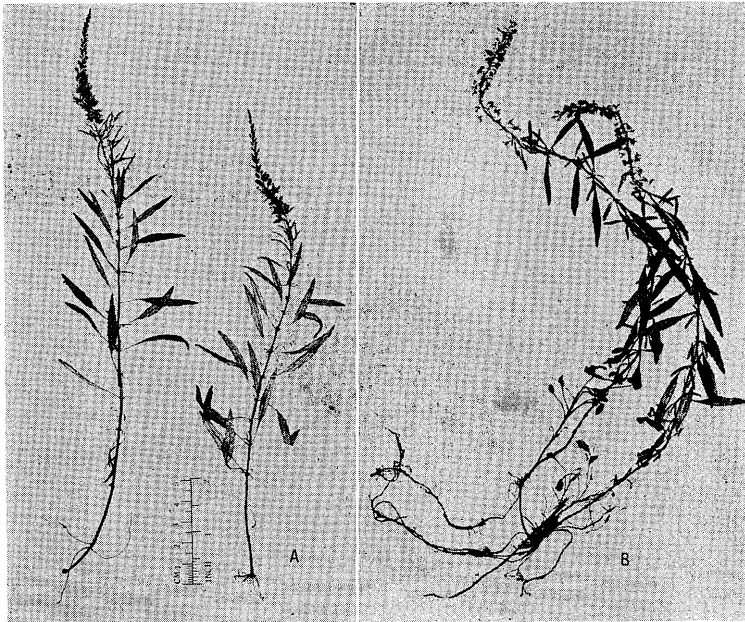


Fig. 1. *Pseudolysimachion ogurae*. A. Izumoshi, Tachikuekyo, H. Ogura, Sept. 7, 1977, type.
B. Iwamicho, Dangyokei, Y. Kadota 20001, Oct. 21, 1980.

石見町の断魚溪と出雲市の立久恵峡にはそう珍しいものでないようである。

本種を含むルリトラノオ属はクワガタソウ属 *Veronica* と同一属として扱われることが多いが、前者は茎頂に明らかな総状花序を作り、染色体の基本数は $n=17$ で、胚乳形成のさいその両端に小さな一核ずつの4細胞からなる吸収器を作るのに対して、クワガタソウ属は腋生花序群では明らかな総状花序を作るが、頂生花序群では包葉と葉の区別が不明瞭で、花は葉腋につく傾向のあること、染色体の基本数は $n=9, 8, 7$ で、胚乳形成のさい両端に大きな1~2細胞の、多量の細胞液と大きな1~2個の核をもつ吸収器を作る点で異なっている。これらの性質はルリトラノオ属がクワガタソウ属とは縁が遠く、クガイソウ属に近いことを示している(本誌 43: 405-412, 1968)。ルリトラノオ属の中でミヤマクワガタ節²⁾のものは、草丈が小さく、花序は短く、花は大きく、花序

2) *Pseudolysimachion* sect. *Schmidtiana* (Borisova) Yamazaki, comb. et stat. nov.

Veronica sect. *Veronicastrum* ser. *Schmidtianae* Borisova in Fl. U. R. S. S. 22: 364, 1955.

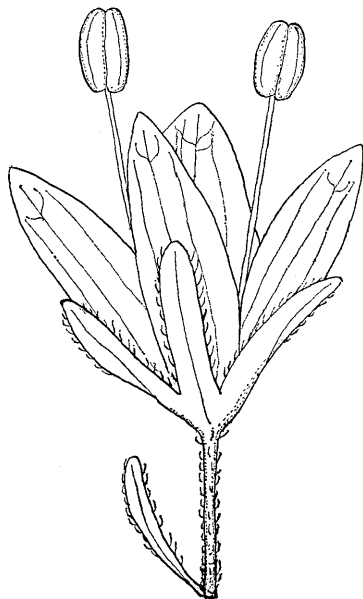


Fig. 2. *Pseudolysimachion ogurae*.
Flower $\times 8$.

の花数が少なくなる点で最も特殊化した一群で、日本列島と日本海の中央にあるウルング島にのみ分布する。またサンイソトラノオはルリトラノオ節の中での最も特殊化した種類と見られる。

***Pseudolysimachion ogurae* Yamazaki, sp. nov.**

Herba perennis. Radices fibrosi. Caulis gracilis erectus 15–30 cm altus, teres sparse crispate albo-pilosus, basi stolonifer, ad axillas foliorum ramos brevissimos foliiferos semper emittit. Folia opposita, petiolis 3–10 mm longis glabris, lamina linearibus vel lineari-lanceolatis apice acutis basi in petiolum attenuatis 1.5–4 cm longis 2–9 mm latis, utrinque glabris, remote serratis, serris 2–8-jugis argutis. Inflorescentia spicato-racemosa 4–10 cm longa 1–1.5 cm lata multiflora, rachidibus sparse crispate

pilosis, demum glabrescentibus. Bracteae lineares apice obtusae 2–5 mm longae glabrae. Pedicelli graciles in anthesi 2–4 mm longi sparse pilosi in fructu 3–6 mm longi glabrescentes. Calyx 4-partitus, sepalis linearibus in anthesi 2–3 mm longis 0.5–0.7 mm latis in fructu usque ad 4 mm longis apice obtusis margine ciliatis corolla subdimidia brevioribus. Corolla caerulea dilatato-campanulata 4-partita ca 6 mm diametro, tubo ca 1 mm longo, lacinia postica ovato-oblonga subacuta 4 mm longa 2.5 mm lata, laciniis lateralibus et antica oblongis acutis 4 mm longis 2 mm latis. Stamina 2 exserta ca 5 mm longa. Antherae late oblongae utrinque obtusae ca 1 mm longae. Stylus filiformis ca 5 mm longus. Capsula obovato-ovoidea leviter compressa emarginata 3–4 mm longa 2–3 mm lata. Semina ovoidea plano-compressa 1.3 mm longa 0.9 mm lata.

P. rotundum var. *subsessile* f. *petiolatum* affinis, sed a qua caulibus stoloniferis, foliis angustiolibus et longi-petiolatis, sepalis longioribus obtusis differt.

Hab. Pref. Shimane, Izumoshi, Ottachicho, Tachikuekyo, alt. 100 m, on rock,

cult. in Sendai (H. Ogura s.n., Sept. 7, 1977, type in TI), ibid. cult. in Kyoto (G. Murata 12139, Aug. 2, 1958; Sept. 3, 1959, Sept. 21, 1962, KYO). Hikawagun, Kubotamura (S. Takahashi 516, Aug. 1936, KYO). Ochigun, Iwamicho, Umano-seyama, Dangyokei, alt. 200 m, on rock, cult. in Sendai (H. Ogura, Sept. 7, 1977, TI), ibid. alt. 400 m (Y. Kadota 20001, Oct. 21, 1980, TI).

□五百城文哉 (画) : 日本山草図譜 150 pp., 99 pls. 1982. 八坂書房, 東京。¥24,000. 五百城文哉の名は割に知られていないが、文久3年(1863)に生れ、明治39年(1906)に若くて死去した洋画家である。晩年を日光に過ごし、その筆に成る画帖が東京大学の日光植物分園に保存されており、しかもあぶなく失火で消失するところであったのが幸にも助かった。私も分類実習で日光に行く毎にこれを見ては故人の筆の跡を偲んだものであった。今回それを版に付したが、中々よく出来ている。これはほとんど実物に接してその姿を写したもので、リンドウやタチツボスミレもあるが、高山植物が主であるからトウヤクリンドウやハクサンチドリはもちろん、コウシンソウやオサバグサなどがあり中々あきることを知らない。中井猛之進先生が一応同定をしているが、大場秀章君が学名を改めてつけた。同君の解説として五百城氏の経歴はよく書けているし、附置した文哉の「秋の花」及び「赤薙の一角」も文哉の人物を彷彿とさせる。(前川文夫)

□里見信生・鈴木三男 : 石川県の巨樹 288 pp. 1982. 石川県林業試験場, 石川県鶴来町。非売品。これはまことに特色のある出版物である。表題に特に天然記念物指定に関する規準の考察という附記がある通り、単なる老樹大木の調査報告ではない。石川県では昭和53年から3年に互り県内の老樹大木を調査したのが基本になってはいる。それが大変な重労働であったことを里見氏は序言で告白しているがそれを超えてはじめて達せられた境地であろう。基準として、幹と根との境界部からの 1.5 m 高さを目通幹周として測り、これに樹高を m で測った数字を加えてこれを表示し、目通の数字で排列した。しかも全国のもの、石川県内のもを二分して示し、その数字から考察して、たとえばコウヤマキでは国の天然記念物では目通 5.5 m 以上、県のそれでは 3.5—5.5 m ぐらいが適当であろうとした。この事は中々いいにくい事だが、それを実現した氏の行動力に大きな感謝と賛意を表したい。石川県の樹木には 335 も写真を添えてある。イチウ、スギ、ケヤキ及びクスノキは日本でずばぬけた巨樹があり、前三者には番付まで載せている。(前川文夫)